

「教育の心理學」に関する研究と二つの世界大戦(Ⅰ)

—戦時における臺灣・中國・フランスと日本の関わりを例に—

坂西友秀 埼玉大学教育学部教育心理カウンセリング講座

キーワード：教育の心理學、世界大戦、植民地教育、ホロコースト、抗日運動

本稿の目的 19世紀末期には、日本は欧米諸国から開国を迫られ、明治政府は、急速に日本全体の近代化を進めた(坂西, 2005)。当時武士の子弟には藩校、庶民の子どもには寺子屋があったが、近代的な科学的知識を組織的に教える普通教育制度はなかった(新井, 2011, 大石, 2007)。欧米の先進的技術を導入し、日本社会の建築・施設設備の整備、さらに社会制度・法制度の近代化を早急に実現するには、欧米に倣った学校教育の制度の確立が必須であった。

1872年(明治5年)、近代学校制度の基礎となる学制が公布された(1879年学校令まで)。全国に小学校、中学校、大学校を設置する大規模な教育計画であったが、それまで学校教育制度のなかった日本には、系統的に組織立てられた教材・教科書もなければ、教育を担う教員の養成も行われていなかった。他方で、庶民の側にも教育を受ける経済的余裕、精神的ゆとりはなく、意識上の準備はできていなかった。「文明開化」がもてはやされるが、欧米の制度や文化を日本人が受容し、それらが浸透・定着するには、大きな反発や軋轢を伴うとともに長い時間を費やすことになる(坂西, 2005)。

学制が公布された同年(1872)に師範学校が設置された。学校教育を担う教師の養成が急務であったからだ。本稿・報告の目的は、心理学がどのような時代背景の中で「教育の心理學」として固有性を獲得してくるのか、その状況・態様を吟味し検討することである。心理学が、師範学校の教科目として位置づけられ、教師養成教育に導入され、「教育の心理學」の固有の領域を形成する過程を、当時の日本の国際関係・海外進出の中で解明する論考は見当たらない。当時の心理学研究の目的・意義を日本の東アジアへの侵略・世界大戦と関連づけて考察する。とりわけ、太平洋戦争時(1941年12月～1945年8月)、日本の植民地であった臺灣、中国東北部(遼寧省・吉林省・黒竜江省)及び連合国側にありナチスドイツに占領されホロコースト(holocaust, Shoah)に加担したフランス(1940-1945)における戦跡、戦争記念館・資料館を現地調査し、当時の状況が当事国・現地で今どのように展示・公開され、さらに理解され解釈されているのか、聞き取り調査も含めて検討する。本稿で取り上げ言及する国・現地は、臺灣、中国吉林省延辺朝鮮族自治州・延吉市、そしてフランスである。

世界大戦と心理学 20世紀初頭から半ばにかけては、2つの世界大戦が世界を飲み込み、日本は東アジアへ進出し全域を席卷した。1910年の日韓併合以後、朝鮮や中国東北部(遼寧省・吉林省・黒竜江省)を侵略した。柳条湖事件を契機に1931年には満洲事変を起こし、翌年傀儡満洲国を建国した。日本の東アジア植民地支配は一挙に拡大した。植民地を統制下に置くためには、現地住民に対する教育は必須で、東アジア「大東亜共栄圏」には日本国内に準じて教育令が施行された(坂西, 2006)。

この時期、日本は内政では、学制を公布し、近代的な学校制度の整備に着手し、文化・教育を

欧米水準に引き上げることに力を注いだ。他方で、富国強兵策を強力におし進め、1894年には朝鮮の支配権を巡り日清戦争が勃発し、翌年には下関条約により臺灣を日本領有とし、台湾総督府を設置した。明治初年（1868）からわずか5年（1873）で徴兵制が敷かれた。あらゆる面で日本を近代化するには、西洋の科学技術・知識が必要であり、近代的な教育の実施・普及とそのため教育制度の創設と整備が不可欠・急務だったのだ。こうした時代背景の中で、近代教育の教育学的な基礎理論・研究の一端を担う一研究分野として教育心理学は位置づけられ、その固有性を形成してきた。

師範学校における教科目の整備は、明治8年中學師範学科の設置後である（坂西，2012）。明治10年（1878年）に、小学師範學科は2年半、中學師範學科は3年半とし、後者に初めて心理学が学科目として導入された（東京高等師範学校・東京文科大学，1931，p.17）。初期には、西欧の心理学研究・理論・動向の紹介が多かったが、次第に算術、国語、家庭科など教科に関わる児童・生徒の理解の過程の内容分析や実験的研究など実証的研究が展開されるようになる（坂西，2014）。

戦時「教育の心理学」 心理学研究は、日本が「文明開化」・「脱亜入欧」を標榜し、「大東亜共栄圏」構想の実現を図るにつれ、現実的・実用的な研究テーマで展開されることになった。日本人の知能水準の比較研究と民族研究はその代表的なものである。北脇（1937）は、アイヌ民族の研究と同時に、「朝鮮、満洲、北支、南支、並びに臺灣島所謂南船北馬して実験実測の資料を蒐集」したことを紹介している。「民族の知能・身体的特徴（文化的民族・アイヌ（和人児童・舊土人児童））：アイヌ民族は我が先住民族の一つとしていま尚山間僻地に素朴原始的生活を営んでゐる…我々の國民性研究室の田中寛一先生は夙（つと）に「東洋諸民族の諸特徴の比較研究」に専念せられ、ここ三、四年は内地を中心に朝鮮、満洲、北支、南支、並びに臺灣島所謂南船北馬して実験実測の資料を蒐集せられたが、本年は衰亡に瀕してゐる民族の智能や身体的特長は文化的民族と如何なる構造的相違があるかを調査する目的で、…北海道に於けるアイヌ人の部落を訪れた。…市内の中学校生徒の智能と向性の検査、…小学校児童の身体検査を行った」。さらに、描写は続く。「狩猟漁業を主とするアイヌの百姓たちの思考や感情は文化民族の人々のよりは構造的にかなりの相違があるのではなからうか。熊祭りや数々の物語歌におけるアニミズム的思想はまだまだこの山間に聚落してゐるアイヌの爺さん、婆さんたちの脳裏にこびりついてゐることであらう。荷負小学校は四学級、教師四名の茅葺きの校舎で児童数約二五〇名、その中舊土人は約二五、六名である。亭々と聳へるポプラの並木の樹影に、眼窩の凹んだ睫毛の長い怪童たちが嬉々として我々エトランゼを迎えてくれたが、その不潔の肉体から発するいやうな臭気で咽せ返るやうな想ひをした。上川、十勝平野のアイヌと異なり、山間僻陬（ヘキスウ・すみ）の地のアイヌは悪質の病菌と低劣な知能の保持者であるから、検査に仲々困難を感じた」。知能研究と民族研究を融合させた心理学研究である。

岩男（1934）は、朝鮮・満洲旅行の思い出を随想風に報告している。「釜山高女・落合校長、花屋ホテル、奇異な朝鮮人の風態、内地人の小學、中等学校の男女、朝鮮人の普通學校（小學校）の男女、高等普通學校（中学校）の男女、大邱…「この旅行の目的とする所は田中先生の日滿鮮民族の精神及び身体的特徴の比較研究である」。旅行の目的は、田中寛一を中心とした、日本、朝鮮、満洲の児童・生徒の精神的発達と身体的発達の違いと特徴を比較検討し明らかにする研究の遂行であった。そのため、朝鮮・釜山の学校でB式智能検査、性向検査、氣質検査、身體検査を実施し、資料を収集した。一方、中野（1934）は、満洲の奉天（遼寧省）の学校で、同様の調査を実施し、

大連・旅順では座談会を組み、戦跡見学を行っている。丸山（1935）もまた、「臺灣及び満鮮の印象」記を載せている。

一例に過ぎないが、心理学は、世界大戦の渦中において「日本民族」の「優秀性」「卓越性」、そして東アジアの諸民族の「特徴」を実証的に示し理解するために、知能研究や民族研究を通じて、戦時の教育の一端一翼を積極的に担っていたといえる。

1 臺灣

はじめに

2013年12月24日から28日まで臺灣を訪問した。日本の最南端、沖縄県与那国島の南方に位置し、中国との領有権問題が深刻化している尖閣諸島にも近い。羽田から飛行機で約4時間少しの距離にあるが、時差は1時間ある。羽田から桃園空港に到着後、タクシーで桃園駅に向かい、臺灣を縦断する新幹線に乗り換えた。そのまま高雄まで南下した。桃園駅（Taoyuan）13:57発、左營駅（Zoying・高雄市）15:36着、1時間40分の列車の旅だ。途中、北回帰線が通る嘉義駅を通過、これを境に南は熱帯、北は亜熱帯になる。高雄（旧称は打狗（ターコウ）だが「日本時代」に改称）は、太平洋戦争中日本が港を改修し、軍が南洋へ進出する基地にした要所である。新幹線は、開通（2007年）6年目で、日本の川崎重工が設計・施工したという。日本と臺灣の関係の深さを示す象徴的な一例であろう。

今回の訪問の目的は、牡丹社事件、霧社事件など太平洋戦争で日本の支配下に置かれた現地の戦跡・記念館等の施設を直接訪問・見学すること（図1）、当時の様子に関係者の親族・縁者から聞き取ること、さらに当時の事件・戦争を臺灣・地元民はどのように理解し、現在につなげているのかを、関連資料を収集することで明らかにすることであった。

臺灣からは石垣島に週一回定期大型観光船がきて、観光客は多い。船は石垣港に停泊し、乗客は船を拠点に島内で買い物や散策を楽しみ、船内に宿泊する。ホテルや民宿は利用せず、地元の収益は減ったと石垣の街で聞いた。尖閣諸島の領土問題が日本・中国間の軍事的な摩擦にまで発展した現在、良好な漁場であるその近海は危険になり、石垣島の漁業にも大きな影響が出ている、と島内きつての鮮魚店の女将が話してくれた。また、「昔は外見を見れば臺灣の人はすぐわかったが、今は発展し豊かになり、日本人と変わらないよ」、と話すのはタクシー運転手だ。日台の間わりは今も太い。今回、台北、台中、台南の戦跡訪問には、黄恒焜氏（星港旅行社股份有限公司）に同行と説明をお願いした。

聞き取り調査・訪問調査

1 牡丹社事件（1871年） 臺灣は、昔から日本と関わりが深い。琉球王国の時代に、宮古島の島民が、人頭税を首里に納めに行った帰りに遭難し、臺灣（高士）に漂着した。臺灣には原住民族の人々が暮らしていた。宮古島の島民は、原住民族の集落にひとまず落ち着いたが、その後ほとんどが殺害されてしまった。牡丹社事件である。原住民族の一つアミ族の子孫である青年（巴里努文化事業有限公司・沈仲文氏）は、「原住民族には国家の観念はなく、事件にはそれなりの事情があった」と語る。16、17世紀頃には、臺灣にはいろいろな国から船が来ていた。香辛料などを運ぶ貿易船の経由地にもなっていた。臺灣近海20kmくらいは珊瑚礁で浅く、船が座礁しやすい。

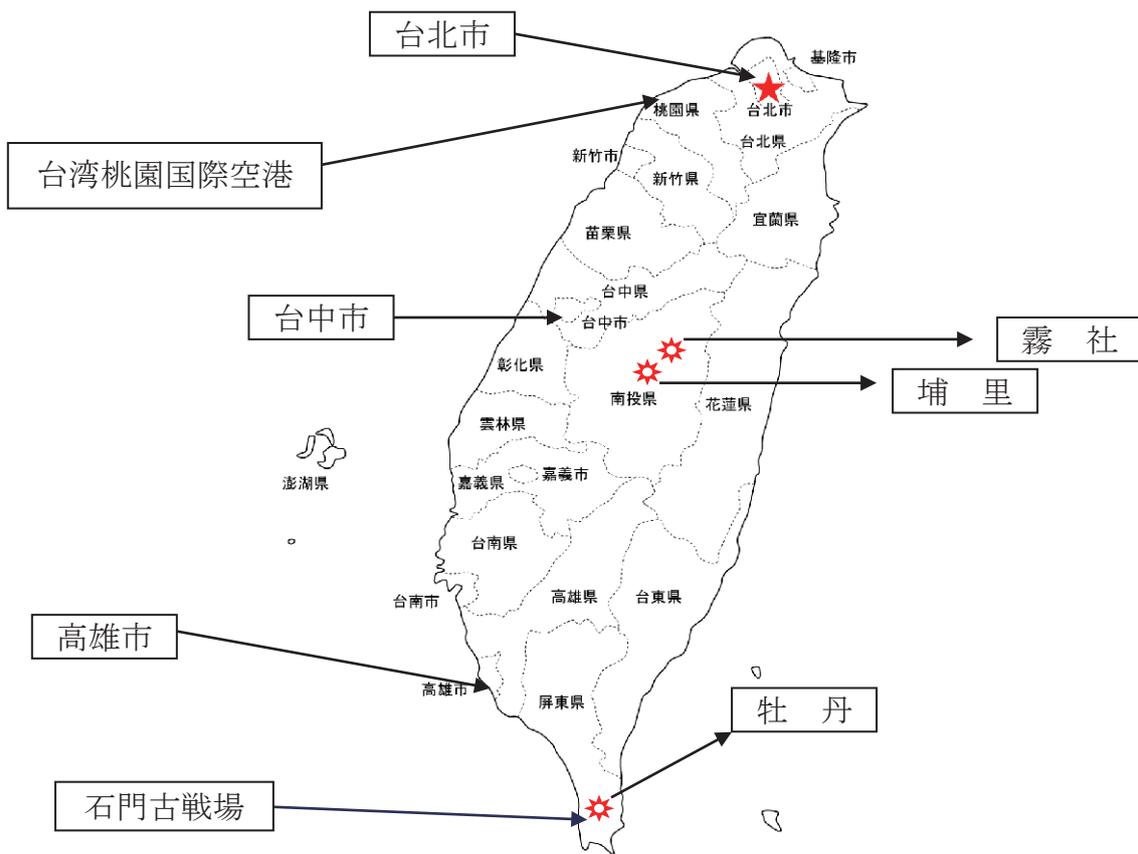


図1 臺灣・訪問地略図（赤丸印）

日本の船もヨーロッパの船もよく座礁した。「内憂外患」に苦しむ明治政府は、宮古島民の漂着・殺害事件を口実に利用したという。

原住民族の立場から考えると、彼らには臺灣という国の観念・概念はなかった。当時、この地の西の平野部には漢民族が多く、東部には原住民族が多かった。漂流民は2、3日浜にいたが、パイワン族の人が発見し山に連れてきた。彼らは、裸で体が大きく文身をしていたので、琉球の人々は、言葉も通じず、みな怖くて脅えたであろう。原住民族には、全島で文身を入れる風習があった。中国では文身を入れた人は、悪事を働いた人を意味したが、原住民族にその意味はなかった。パ



図2 牡丹事件の説明・アミ族の青年（墓地）



図3 山岳部に住む原住民族の地元料理

イワン族の人たちは、琉球の人たちに水、食べ物、着替えを持って行き、少し落ち着いてきたので山の居住地に連れてきた。パイワン族には、知らない部族の人に会ったら、村に招待してもてなす習慣があった。しかし、66名もの大勢の人をもてなす食料はなく、男たちは狩りに出かけた。大きな式典や狩猟は年に一回くらいしかやらない。男たちが出かけた村は静まり、女性は火を焚き、お湯を沸かし、歓迎の準備を始めた。漂流民は、自分たちを「食べる」用意をしていると思い、ますます怖くなり、緊張しきった（図2・図3）。

6名は、漢民族の多くすむ西方に逃げた。漢民族は文化程度が高く、安心だと考えたからであろう。この6人は村人に挨拶もせず、水や食べ物を食べてから逃げてしまった。原住民族の人にとっては、失礼極まりない振る舞いだっただろう。琉球難民は、溪谷に沿って「石門」に逃亡した。夜狩りに出かけた男たちは、集落に帰ってきた。みな逃げた後だった。この時点で宮古島の漂流民は、村人の敵になった。原住民族の集落では、同じ住民でもたまたま敵になることもあった。別の集落に行くと敵に間違えられ、疑われることがあった。こうして、「敵」54人を追跡し殺害した。難民はみな逃亡した「敵」と見做されていたからだ。66名中11名（日本では12名のようなのだが）は、パイワン族にかくまわれて助けられた。

一帯は恒春半島といわれ、牡丹社事件は希有な事件だった。船が海難事故に遭った場合、皆で助け村に連れて行った。宮古漂流民は地元の実力者楊友旺を通して、陸路・海路を経て臺灣府城(台南市)に送った。牡丹と高士は同盟関係にあり、逃亡民と一緒に追いかけた。牡丹の住民は殺害に関与せず、高士事件というべきものである。パイワン族には工作刀、礼刀、戦刀の3つの刀があった。高士では首狩りをしないが、牡丹では首切りをし、首長の所に届けて飾った。戦いに出ると戦死することもあり、成果として持ち帰る習慣があった。

これが、沈仲文氏の牡丹事件の受け止め方だ。原住民族と琉球漂流民の世界観の違いが、悲惨な結果をもたらした。現在、慰霊の墓碑は統埔（統領埔）村に建立されている。ここには遺体ではなく、服飾品や持ち物などが埋葬されている。墓は亀型で「帝王の墓」を意味する。

2 臺灣出兵（石門古戦場記念碑）（1874年） 宮古島民の漂着に端を発し、日本国内では「臺灣征伐」論が勢いを増した。消極的な政府を押し切って日本は臺灣に兵を送った。臺灣出兵である。臺灣に上陸した灣や進軍した牡丹郷の溪谷が一望できる小高い山に登った。石門古戦場記念碑だ。四重溪谷が見渡せ、頂上には忠魂碑（西郷従道が建立した日本軍用記念碑の外装を新装し臺灣の記念碑にした尖塔）がある。日本の統治を排除し、中国に復帰することを国民党が祈念した石塔で、台座には臺灣の原住民族の礎石が据えられている。

日本軍は、横浜（実際は長崎港）を出港し、西屏山の先の海から上陸し、四重溪谷沿いに進んだ。牡丹社と海の距離が近く、上陸し易い地形だからだ。原住民族同士は、ことばが違い、自由な意



図4 山向こうの海岸から川沿いに侵攻した日本軍



図5 日本軍との激戦地「石門古戦場」

思疎通は難しかった。日本軍との関係、関わりも部族毎にそれぞれに異なった。マカタオ族は日本軍の兵営作りをし、日当をもらっていた。日本軍用の食料を準備・調達するための駐屯地作りであった。マカタオ族は、日本人に必要な物資を揃えることで商売をしていた。戦闘は、日本軍と牡丹社事件の当事者パイワン族の間でだけ行われた。眼下に見える河は、昔は川幅があり水量も多く、物資は運搬船で運んでいた。

5月に攻撃が始まった。日本の戦死者は少なかったが、熱帯病・マラリヤに罹る兵士が多かった。戦死者は、約10人だったが、病死者は560人を越えた。暑くて服を脱ぐ、喉が渇き川の水を飲むなどして、多くがマラリヤに感染し、病気になった。日本軍には、熱帯病を研究する医者が多く同行していた(図4・図5)。

太平洋沿いには3,000m級の急峻な山々が連なる。牡丹郷も山は険しく谷は深い。稜線伝いに奥地に進むと手前の高土を経て牡丹社に着く。昔は道がなく、川沿いに進んだ。入り組んだ溪谷は自然の要塞をなし、日本軍の攻撃は難しかった。時あたかも梅雨時で水量が多かった。しかし、進攻時には地元の村人が、日本軍に道を教え手引きし、牡丹社は滅ぼされた。牡丹の戦士は250人のみで、車城郷側と旭海の双方から日本軍は挟み撃ちにした。道がなく軍は高雄方面から船で進攻し、台東懸方向に抜けた。清朝は、牡丹社事件後臺灣を重視し、恒春鎮に城を築いた。漢民族が多数移民し、懇丁はその代表である。90%以上は原住民の血が混じり、通婚して今は平和になった。現地では「唐山公がいる、唐山媽がいない」といわれ、「中国のおじいちゃんはある、中国のおばあちゃんはいない。臺灣で結婚しているから。」の意だそうだ。ここは、臺灣にとって重い意味のある地だと沈氏は語る。

3 霧社事件(1930年) 日清戦争の勝利で、日本は臺灣を領有し(1895)、臺灣総督府を置いた。軍の支配は、臺灣の隅々に及び、急峻な山間に住む原住民族も例外ではなかった。霧社事件は、日本の侵略と圧政に対する原住民族の激しい抵抗だった。多くの日本人が殺されたが、日本軍が殺害した原住民族はそれを遙かに上回る(鄧, 2000, 2001)。

霧社へは台中市街から車で順調に行って2時間かかる。臺灣の中央山脈に分け入り、つづら折りの山道を標高約1,000m以上まで登った山岳地帯(1,000~3,600mの地域)にある。途中「紹興酒」で有名な埔里の町がある。盆地で水がきれい清酒の醸造に適した地である。日本統治時代に酒造技術を移入し、現在の蔵元はそれを引き継いでいる。店内には、売店とは別に、臺灣の酒造の歩みと専売制度の歴史、酒造用具・技術の展示室もあり、日本の深い関与がわかる。霧社へ向かう沿道には日本軍が植えた1.5kmほどの桜並木がある。峡谷は狭く、日本警察は、当時霧社の集落に入れなく手前で止まった。

仁愛郷市役所の邱健堂氏に話を伺い、事件関係の現地を案内いただいた。彼の家系はサイセツ



図6 学校跡・旧建物は電力会社が使用



図7 1,000mを越える山岳地帯にある霧社

ト族で、部族での名前は「タクン」(Takun, Walis)、日本名は「安田」、戦後は「邱-Chiu, Chien-Tang)と3つの名前を持っている。名前に臺灣の激動の歴史が反映している。彼は、日本の研究者と交流し、日本大学で開催されたシンポジウム・交流会で霧社事件の発表をした。今も霧社事件の共同研究を進めている。生年は、霧社事件後の1951年である。父は、日本軍に打たれて死んだが、南洋ニューギニアでの日本軍の戦争に参加した。母親は祖父と同居していた。祖父(母の父)は日本軍に抗して殺され、子どもと「奥さん」は自殺した。当時自殺が多かったという。生きていた人は、1931年に川中島支社に298人が強制移住させられた。原住民族は昔は9族だったが、今12族に細分されている。

邱氏は、「事件で親族が日本軍に殺されました。住民の不満と怒りは頂点に達していました。」と話してくれた。日本軍は1903年に霧社に入り、悪逆無道の限りを尽くした。霧社事件では、土地と生活の糧を奪い、老若男女を問わず労役にかり出し、建築・土木工事・木材の切り出し運搬など、ありとあらゆる苦役を課し続けた。事件は、極限状態を越えた原住民族の苦しみと怒りの結果であった。各部落(社)には、住民を統率するモナルート(集落の長)がいた。日本は、要所の集落に警察所を配置し、住民の監視と徴用を徹底し、絶えず策謀を練り、部族間の反目・対立を巧みに誘導した。霧社では同じブヌン族であるにもかかわらず、隣接するブヌン族に20人も殺され、敵対心が強くなったという。

邱氏によれば、原住民族の生活と文化、慣習・しきたりを尊重し、霧社事件を「しっかり」「まとも」に研究し、著した著書は少ない。関連映画や小説は制作・出版されているが、彼は見ないし読まない。真の歴史・事実ではないからだ。毎年、臺灣で交流している日本人研究者の下村さん(下村作次郎氏か)は、お酒を酌み交わす中で「私の兄弟」、魚住さんは(魚住悦子氏か)「私の娘のようなもの」と明るく語る。霧社事件の詳細は、霧者の地理・地勢、原住民族の伝統・文化・経済・生活・思考様式などを丁寧に追い、真相を解明する鄧相揚(2000, 2001)「抗日霧社事件の歴史」「抗日霧社事件をめぐる人々」(機関紙出版)にまとめられている(図6・図7)。

総督府の圧政・暴虐に苦しみ、牛馬以下に扱われ霧社の住民は追い詰められた。モーナ・ルーダオの指導の下に彼らは蜂起し、各地の駐在所と総督府主催の戦争記念日・「連合運動会」の場(霧社公学校)を襲撃し、日本人134人・中国人2人を殺害した。動転し震撼した日本軍・総督府は、軍隊1,300人あまりを動員し、陸上の攻撃・砲撃と空爆を繰り返し、抗日原住民族の殲滅を図った。ガス弾も使用された。「戦死者85人、空爆の死者137人、砲弾による爆死者34人、「味方蕃」(日本軍に協力した原住民族)奇襲隊による首狩り犠牲者87人、縊死者290人、抗日6部落1,236人の52%弱が殺された。これが霧社事件だ。懐柔策・陰謀術策を弄し、部落・集落間の対立・敵対を誘い、原住民族同士の殺戮が巧みに仕組まれた。捕まり「保護蕃収容所」に収容された住民190人も、「味方蕃」に殺害された。鎮圧後も、抗日部族278人の住民を強制移住させ、厳しい監視の下、「抗日分子」を洗い出し、38人は留置されたまま死亡した。第二霧社事件である。

4 邱氏にとっての霧社事件 邱氏は、臺灣大学の学生だった。霧社事件や指導者モーナ・ルーダオの知識はほとんどなかった。家でも地元でも事件のことは、話題にならなかった。あまりに悲惨な事件だったからだ。学生の時、事件のことを聞くと年配の人は怒った。霧社の日本人多数を殺害し、住民は恐くて集落には戻れなかった。部族には国家の意識がなく、粟や芋を作り狩りなどで自由に暮らしができた。日本統治後は、部族に自由はなくなった。日本式の教育を普及させたが、住民にとっては強制以外の何ものでもなかった。平地に住む漢民族は、文字文化があり、教育は強制されなかった。部族にことばはあったが、文字がなかったため、日本軍は教育を強制

しやすかった。当時の住民は、複雑には考えなかった。今、教育は知識を与え、知恵を生み、意識を解放し、有益で必要だと邱氏は語る。祖母の生きた「日本時代」を振り返るとき、日本人に対して恨みはないが、「ひどいことをした」という思いはある。今日では、モーナ・ルーダオのことを学校教育で教える（図8・図9）。

川中島での移住3年間に、日本軍は事件関係者を内偵し、23人の住民を殺害した。「怖くて話すことができない」、住民・古老の口をつぐませたのは執拗な日本軍の惨殺行為だった。事件はルーダオ一人の問題ではなかった。彼は、本心では暴力の行使・襲撃に反対していた。事件が大きくなり、誰も責任を取らないので、彼の責任にした。1911年、日本軍は、ルーダオを日本に渡航させ、軍人学校、船、飛行機、等日本の近代化を見せて教化していた。1920年に蜂起する計画があったが、スパイ容疑で警察が逮捕した。この年には、別の部族が反発したが、霧社の人たちが抑え一旦沈静化した。若者・青年に対する日本の統制・警戒は厳しく、彼らはいつ殺されるかわからないと思っていた。



図8 抗日戦士・烈士の墓



図9 「猛毒 百歩蛇」・勇者は恐れぬ

部族間には日本への対応に大きな違いがあった。邱氏が、初めて事件の話を知ると、古老たちは「なぜ事件のことを聞くのか」と驚いた。ルーダオの遺体は、狩りに入った人が発見し、霧社に運び埋葬した。その後、臺灣大学の医学院に移し、さらに文学部に移管した。学生の頃はまったく知らなかった。遺体には鉄がはめられていた。祖母とルーダオの家は隣同士だったと聞いていた。「遺骨だけでも私（邱氏）より大きく、背が高く強かっただろう」と振り返る。日本時代には、「背の高い人は殺され、背の低い人が今残っている」。事件の子孫として毎年10月24日には祈念式典を行っている。国民党政府は1953年に記念碑を建立した。日本の記念碑があったが、撤去した。事件のあった学校は、今臺灣電力会社の寮できれいに整備されていた。日本時代に水力発電所が作られ、現在も稼働している。ダムサイドの二つの集落は、事件には無関与だったが強制移住させられたという。

仁愛郷公所から埔理方面に少し行くとモーナ・ルーダオと霧社胞抗日起義記念碑がある。その先に霧社事件の中心地となった公立学校跡地がある。木造の建物は現在も住宅として利用されている（図6）。事件で殺された日本人の祈念碑がかつてあったが、今は住宅が建ち、石の階段だけが残る。石碑の球形の頭部は、警察官だった人（下山）の家にも保管されている。「日本時代」に住民の抗日意識を削ぎ、「反日文士」の情報を集めるため、有力者の娘と警察官の政略結婚が進められた。3年間の赴任期間が過ぎ転勤時になると、彼らは妻・家族を捨てるのが通例だった。「部落の頭の娘と結婚した近藤（勝三郎）は、3年で逃げた」。住民の支配を狙って懐柔策で結婚し、数年で置き去りにする。一夫一婦制を厳格に守る原住民族は、みな激しい怒りをもった。「警察官

にも中にはいい人もいて、現地に残った人もいましたが」と邱氏はつけ加えた。

「日本時代」には農業振興策が図られ、「見晴らし農場」「農業訓練学校」もあった。狩猟、焼き畑農業から、定地・水稻耕作への転換が強制された。「湖碧」を眼下に周辺の高山を一望できる見晴台に行き、強制移住地、集落の位置などを確認し、邱氏の話をついた。

5 二二八記念館と臺灣統治 霧社事件の翌年、1931年柳条湖事件にかこつけて満洲事変が起こり、日本の東アジア侵略が始まった。「大東亜共栄圏建設」の正義を掲げ、15年にわたり東アジア全域を侵略した。霧社事件は、ホロコーストであり、日本の侵略戦争の性格と実態を如実に示すものだ。今回事件を知り、その本質を理解できたことは重要である。



図10 建物は旧日本軍の放送局（NHK）



図11 旧台北帝国大学医学部（臺灣医大）

1945年、日本の敗戦により、臺灣の「日本時代」は終わった。しかし、臺灣の地方自治の実現、民主化は険しいものだった。1947年には、臺灣統治者と民衆が対立し、国民政府主席蒋介石は、要請に応じ鎮圧のために臺灣に派兵した。二二八事件だ。「臺灣の主だった知識人とリーダーは、この事件で徹底的に粛清され、亡くなりました」。「私はここ（台北二二八記念館）にはほとんどきません。胸が押しつぶされ、涙が止まらないからです。悲しいです。」、案内してくれた黄さんは静かに話した。二二八記念館の設立は、臺灣の歴史の捉え直しであり、民衆の解放と地方及び臺灣全体の自治を生み出した苦しく厳しい道のりを再確認し、新たな未来を展望するためのものだ。館を訪れて強く思った（図10）。

記念館はまだ新しく、私はその存在を耳にしたことすらなかった。記念館は、二二八和平記念公園の一角に建ち、公園入り口正面には国立臺灣博物館がある。脇を走る公園路を挟んで臺灣大学附属医院が並ぶ。医院は、1895年臺灣総督府臺北医院として設立され、1905年に臺北帝国大学設立後国立臺灣大学医学院に、戦後臺灣大学医院になった（図11）。霧社にも「公学校」「蕃童教育所」「尋常小学校」があり、麓の埔里には尋常小学校高等科があった。中学校、専門学校、高等学校が各地に創設され、1935年に臺北帝国大学が創立を迎えた。

日本語の使用を奨励し、臺灣全域に教化教育を普及させた。「黒板」用の木材が足りなくなるほど学校が作られたということだ。旧臺灣総督府（現中華民國總統府）は、現在も使われており、日本統治時代の「教科書」も展示されている。総督府の向かいには國史館があり、日本統治時代は臺灣総督府交通局通信部庁舎（1924年建築）だった。臺灣全土の郵便、郵便貯金、郵便為替、郵便年金、簡易保険、電信及び航空監督とその計画業務に関する事項を担当し、当時の臺灣における郵便、電信事業の最高主管機関としての役割を担っていた（館パンフレットより、2013）。二二八記念館が建つ地域は日本統治の要衝だったことがわかる。

台北市内に限らず臺灣には、「日本時代」の建造物が沢山保存され、利用されている。がっしり

した館は、当時の日本軍の徹底した植民地支配を彷彿させる。高雄の高雄市立歴史博物館もその一つだ。「当館は日本統治時代…市庁舎として建てられた建物で、…1939年に落成しました。…深い歴史的意義を持つ当館は文化遺産として残されました。…1998年（民国87年10月25日、『高雄市歴史博物館』として正式に開館し、臺灣初の地方自治体運営の歴史博物館となりました。…建物は2004年（民国93年）に高雄市の『市定古跡』に指定され歴史的建造物を文化施設として整備、再利用しているモデルケースとなっています」（高雄市立歴史博物館，2013）。当時の館の多くは、中国と日本と西洋の建築様式を巧みに融合した建築になっていて、西欧の強い影響を見て取ることができる。

6 NHK臺灣支局 二二八記念は、総統府が民衆への情報伝達と宣伝を発信するために創建した旧放送局である（図12・図13）。日本国では、「大正14年3月22日、東京放送局は3局（東京・大阪・名古屋）のトップを切って放送を開始した。その後、3局を合同して単一の事業体をつくる計画をすすめて大正15年8月に社団法人日本放送協会（現NHK）が設立された。東京放送局総裁の後藤（新平）は、アジアを視野に日本が放送の先鞭をつけ、主導すべきと考えた。「東洋全体にラジオを以って文化を普及すべきものだ、これは日本でなければできないことだ、というのです。日本の放送局が進んでアジアの中心地点に大電力の、どこにも電波が届くような大きな放送所を作って、そして無料で聞かせなさい、というのです」（1926年・専務理事の新名直和）と述べている（昭和36年11月NHK放送文化研究所聞き取り，松本，2007）。後藤のこの構想は、その後の組織改正と後藤の辞任によって実現しなかったが、東京放送局にアジアに向けた情報発信基地の役割を持たせるという壮大な構想を持っていたことがうかがえる。すでに後藤の脳裡には、制覇していた臺灣はもとより、東アジア全域の植民地向け放送の構想があった。この時期、社団法人日本放送協会は、国策に沿う放送局として誕生したことがわかる。

「臺灣総統府は1935年、臺灣統治40年來の成果を示すべく、『始政40周年記念博覧会』を挙行政した。その際、文書（勧誘状、チラシ、小学校児童懸賞作文、等々）、会報、新聞・雑誌、ポスター、看板、電飾、幻灯連続三角旗・気球・雪洞等の掲示、等、あらゆる手段を活用した。中でも特筆に値するのは、ラジオ放送局の開設、放送の利用、全国出中継（ママ）、臺灣島内放送、実況中継を初めたことである（林，2012）。林によって開設の経過を見よう。

「日本統治下の臺灣のラジオ放送は、1925年6月17日、臺灣総督府始政30周年の記念展覧会における10日間にわたる50ワットの試験的放送を嚆矢とする。…1928年10月に庁舎の一部を改造



図12 228記念館特別展案内



図13 「臺灣放送局」に改称（台北市政府文化局，2011）

して放送設備を施し、同年11月1日より1キロワットの「試験放送」を開始した。…同年11月22日より『実験放送』に移った」(林, 2012)。

「臺灣の放送事業は、昭和天皇即位の記念事業として計画され、台北放送局で1931年1月22日に試験的、2月1日から本格的放送事業が開始された。台北・台中・台南3局の放送開始日は、次の通りだ。台北(JFAK)・10KW・1931年1月22日、台中(JFBK)・1KW・1932年4月1日、台南(JFCK)・1KW・1935年5月11日(資料の出所は、臺灣総督府「臺灣日誌」(復刻版)緑陰書房, 1992年:「臺灣年鑑」, 臺灣通信社, 1938年12月で、それらより作成されている)。1934年7月には、日本放送協会・東京中央放送局が国際電話株式会社長崎送信所を利用して臺灣、樺太、朝鮮、関東州、満洲、南洋等「外地向け」短波放送を開始し、日本内地の番組を臺灣で放送した。また、毎月1回臺灣から日本へ送信し、臺灣本島が紹介されるようになった。臺灣の放送は、中国南部、南洋在住日本人向けの唯一の日本語報道、娯楽機関でもあった」(林, 2012)。NHKの臺灣支局開設は、「大東亜共栄圏」全域を俯瞰したものであり、情報戦略の一つだった。

7 二二八事件 記念館に入り、日本の植民地支配から解放された直後、臺灣民衆にさらなる圧政、弾圧と肅正が加えられたことを知り、暗澹たる気持ちになった。「ひどことをしたものだ」、霧社の邱氏のことばが頭に浮かんだ。「この事件で指導者だった知識人、良識のある人々が弾圧され、殺されました」、案内の黄氏は低く重苦しい声でつぶやいた(図14・図15)。エリートは、ほとんど殺されたという。日本の大学を卒業した医師、法律家、政治家、教育者もいた。

日本の敗戦で、誰もが地方自治を自分たちの手で作り出す機会がきたと思った。期待に反して臺灣の治政を任された行政長官公署は、厳しい統制を敷いた。経済は低迷し、失業の増加、インフレの悪化、専売政策(政府独占)の誤り、等で、民衆は疲弊し、社会的な混乱を招いた。加えて、役人の賄賂・特権行使等の不正・汚職が横行し、政治腐敗が進んだ。植民地時代、日本軍についた人が多くいたが、戦後冷遇され、仕事もなかったという。人々の不満は募った(台北二二八記念館, 2013)。一方で、陳義政府は北京語を公職任用の条件とし、臺灣人任用の道を閉ざした。さらに、「祖国復帰後1年で日本語の新聞・雑誌を廃止することとし、臺灣人民が植民地統治で受けた抑圧と無念さを無視した。それに対して、日本は占領42年後に初めて漢文の新聞を廃止した。民衆の現実を無視した陳義のやり方は『行き過ぎ』だとの反発を生んだ」(台北市政府文化局, 2011)。

こうした中、「1947年2月27日、…専売局の役人が(ママ)約40歳の女性林氏が闇タバコを販売しているところを見つかり、双方の衝突があった。林氏は頭部が役人の拳銃で撃たれ、血まみれになった。それを見て怒った民衆が役人たちと衝突した。取締りの警察官は急遽、通行人の陳



図14 タバコ密売で林江邁逮捕(228事件発端)



図15 228事件軍事鎮圧

文溪を射殺した。それで、事件が急速に深刻な状況に広がったのだ。これが、二二八事件を起こした契機の「タバコ取締り血まみれ事件」である（台北二二八記念館，2013）。「打倒陳義」のスローガンを掲げるなど、抗議行動は、臺灣全土に拡大した。緊迫した情勢は、臺灣放送局（現二二八記念館）を占拠した民衆によって、瞬く間に臺灣全土に広まった。警察と軍人・憲兵は、厳しく弾圧し、民衆を機銃掃射し、手当たり次第に逮捕し、殺害した。

黄氏によれば、本省人（臺灣人）と外省人（中国本土の人）の対立だった。蒋介石に援軍を求めた陳義は、戒厳令を敷き、自らの臺灣統治のために多くの人々を死刑にした。中央政府は、派兵しないと宣言していたが、蔣中正（蒋介石）は鎮圧部隊の派兵を命じた。基隆に上陸した部隊は、市民に機銃掃射を行い、台北市を制圧した。事件は高雄にも飛び火し、市内の混乱と政府軍の官庁への攻撃が始まった。高雄要塞司令彭孟緝が、市民・改革分子の掃討を指揮した。国民政府は、臺灣中を鎮圧し、密かにエリートたちを殺害した。反対派の完全討伐を狙った。新聞社、学校の閉鎖など、軍の弾圧は徹底したものだ（以上、黄氏）。

広がる騒乱に、陳義は、「二二八処理委員会」を設置して、各地の民衆の意見を反映させて事件の収束・解決を図った。この時国民政府の臺灣駐在情報治安機関は、中央組織に秘密電報を打ち、情勢は政権が奪取されるほどの危機にあると伝えた。結局、処理委員会の要求を拒否した陳義は、蒋介石（中正）主席に派兵を要請した。国民政府軍の応援を得て、「民意に従って民意をなだめる態度を一変させ、対話を拒否し臺灣全土に戒厳令を発しました。台北と基隆に…処理委員会の解散を命じました。…大軍が基隆に上陸し…軍隊は台北に進入し…銃声が鳴り止みませんでした。…軍法によって改革派は奸党および暴徒と見なされ、謀反の罪により二二八事件処理委員会などの改革派は逮捕され、銃殺されました」（台北市政府文化局，2011）。暴力的に鎮圧し、地方の安定化を進めたのである。

黄氏の説明は続く。「二二八事件処理委員会」の委員ら改革派を逮捕し、個戸調査を実施し連帯保証誓約もとった。反対派への自主的「更正」を扇動した。蒋介石は、外省人を保護し、中国から要人を連れてきた。臺灣人は登用しなかった。二二八事件の死亡者は、8,000人とも28,000人ともいわれる。高雄市立歴史博物館では、事件の常設展示が行われている。展示は、事件が臺灣の歴史に占める位置の重大性を示すものである。記念館の展示から各界の犠牲者の一部を掲げて締めくくろう。医学界：郭章垣（慶應大学医学部）、郭守儀（昭和医学専門学校）、顧容泰（日本医科大学・未詳）、施江南（京都帝国大医学部）、許祖勸（筆者記録不鮮明で未詳）、教育界：林茂生（東京帝国大学・淡江中学・淡水中学）、徐征（北京教師・台北帝国大学）、司法界：吳鴻麒（日本大学法科）、林桂端（早稲田大学法学部）、等々だ。

考察

統治教育と心理学 日本の教育制度に倣って臺灣教育令が施行され、学校が設置された。今でも年配の人に、日本語を理解する人は多い。邱氏も流暢に日本語を話す。「日本時代」に、日本語が強制されたからだ。学校新設で「黒板」が大量に必要なになった。当時植えられた「黒板の木」が、いたるところに街路樹として立つ。それほどに、多くの日本式学校が臺灣に設置され、教化のための日本語・日本文化教育が推し進められた。現在校舎は改修されているが、使用されている学校もある。

霧社には、主に3種類の学校があった。一つは、原住民族の子ども対象の「蕃童教育所」（4年）

で、日本語の読み書きができない子に「読み・書き・算」、修身や日本式生活習慣の指導を行った。教師は、警察官が兼務した。二つ目は、「蕃人公学校」（4年）である。比較的発展している地域の原住民族の子どもを対象にした。第三は、日本人の子弟を対象にした尋常小学校である。学校教育は、「蕃人」の日本文化への馴化と同化策の基礎であり要であった。日本が、文字文化のなかった原住民族を支配する強力な手段であった。

心理学も例外ではなかった。「中華民國維新政府：一、余ハ中華民國維新政府教育部ノ招聘ニヨリ、小学校教員再教育ノ講師トシテ。南京ニ七月中、下旬出張、五日間教育学ノ講義ヲ行ヒ、コノ機会ヲ利用シテ日華両国民ノ肺肝ヨリノ親善ヲ謀リ、時局ノ真相ニ徹セシメ、両国民一心同体、東亜新秩序ノ建設ニ邁進セシメント努力セリ。…教育学講義要目…第五章 学校教育論（一）學校之組織 ①生命力涵養機関 ②性格鍊成機関（甲）性格之意義（乙）性格學（丙）性格発達之諸条件 …」（植崎，1939）。客観的・科学的手続きを中核に置く心理学であったが、臺灣總督府の招聘で、心理学者が、小学校教員を対象に時局を反映した講義を行っている。「性格鍊成」「性格学」「性格発達学」などの心理学領域が学校教育論として講義に組み込まれていた。

「蕃」の表現が頻出するが、これは未開で文化に浴さない野蛮の意で用いられ、「蕃人」は原住民族を指している。霧社・ホーゴ社・ロード社・タロワン社等々、「社」も使われるが、原住民族がまとまり共同生活する集落・部落を意味している。霧社にはいくつかの部族の社があり霧社群を成している。「蕃人」「理蕃」「味方蕃」「蕃地」「霧社蕃」「蕃通」「和蕃」「兇蕃」「兇蕃蕃婦」「兇蕃蕃丁」、いずれも原住民族を見下し人間として見ていないことばである。皇国民化には統制教育による原住民族の開化が必要との考えからだった。

道路や水道などの生活関連設備（ライフライン）も日本時代に整備された。生活環境の近代化、工場や産業の育成、植民地教育の普及等、臺灣の今につながる社会基盤を全面的に日本様式に整えた。しかし、解放後、国民政府が、日本語を禁止し中国語に切り替えたとき、臺灣住民・社会には大きな支障となり、政権に対する強い抵抗を生んだ。本来、臺灣人民にとり、中国語は母語であるもかかわらず、だ。原住民族には、漢民族と全く異なる独自の文化・言語・社会があり、国民政府の施策は一層厳しい現実になった。今回、原住民族の戦後について話を聞くことができなかった。大きな反省点である。いずれにせよ、社会・文化を悉く支配し、根こそぎ日本の様式に造り替え、教化した罪の深さは計り知れない。

「蕃族」と心理学 牡丹社事件、霧社事件、臺灣統治、二二八事件、何れも隣国臺灣への日本の侵略と究極的暴力に連なるもので、二つの事件はその後の極東全域に対する日本の植民地政策展開の出発点になっている。だが、私は中等教育で「臺灣出兵」等に関わる授業を受けた記憶がない。現地訪問調査・聞き取り調査は、支配国・被支配国の両国民衆に対して教育がもつ役割とその重要性、そして絶大な影響力を改めて深く考える契機になった。中等・高等教育で日本の近代史を史実に基づき教え、学び、考える機会を教師・生徒・学生に提供することが必要だ。

牡丹社事件は、アジア進出に際しての「原住民族」に関する民族研究が重要であることを日本の政府・軍に認識させる契機になった。日本統治時代に行われた原住民族に関する調査報告書は、これを裏づけるものだ（国立公文書館・アジア歴史資料館，2014参照）。部族毎にことば・文化・社会の仕組みが異なり、相互のコミュニケーションが難しかった。日本が「臺灣征伐」に出兵した時、原住民族との交渉ややりとりは、周辺部族のことばを知っている人が、単語を中心につなぎ合わせ意思疎通を図った。交易・交流が少なく、十分に通訳できる人はいなかった。

後藤岩男や中野佐三ら多くの心理学研究者が臺灣や他のアジアの諸民族を訪れ、報告や研究が

行われた背景を知ることが必要である。「『日本人』にまでの教育、…大和心の啓培…」(岩男, 1935)の記述は、教化が心理学者にも強く意識されていたことを示す。日本軍の起こした事件や統治は、現地での理解・解釈と日本でのそれらとの間に、ズレ・乖離が生じることが多い。原住民族の中には、「首狩り」の伝統をもつ部族もあった。現在では、祭事(催事)の時に象徴的行事として残る。長い槍の先に飾る頭蓋は、今ではボールに変わった。山には「百歩蛇」がいる(図9参照)。百歩も歩かないで毒が回って死に至ってしまうことが、名前の由来だ。パイワン族にとっては、「情報が伝わる神様」なのだそうだ。社会・文化のあり方、人々の行動の意味を理解せず、蛮習として踏みにじり、支配者日本のほしいまま振る舞った。「『牡丹』もまた日本が命名したものだ。

溪谷沿いには、地元の粟酒と料理を食べさせてくれるアミ族の食堂がある。原住民族の伝統紋様つき焼き陶器、帽子やTシャツなども販売している。店は、その名も「蕃品交易所」だった。戦時中、朝鮮、中国、満洲、臺灣、さらには南洋諸島の諸民族の文化、身体的特徴や「知能」の研究が盛んに行われた。その背景と脈絡を理解することなく、心理学研究の性格と本質を見極め深く理解することはできないだろう。

歴史は過去のものではなく、私たちの現在に密接に結びついている。国内で初めての「台北・国立故宮博物院」の至宝が東京国立博物館で公開された。特別展は「台北 国立故宮博物院—神品至宝—」の名称で、東京国立博物館で6月24—9月15日に開催の運びとなった。開催直前に、名称問題が生じた。日本の広報に「国立」の名称がなく、台湾から厳しい指摘があった。台湾の国立故宮博物院の馮明珠院長は、「日本側が同博物院名称で「国立」の部分の復活をしない場合には特別展を中止するとの主張が、同博物院側としての判断だった」(Searchina, 2014)と記者会見している。記念すべき歴史的な開催が危ぶまれるほどの問題になる背景は何か。不思議に思う人もいるかも知れない。二二八記念館の項で考察したように、日本統治時代と解放後の台湾民衆の苦難の歩みがあるからだ。近現代の歴史から無関係に今があるわけではないことを特別展は教えてくれる。

引用文献

(目的・臺灣)

新井淑子 (2011) 埼玉の近代教育史と不動岡高校百年の歩み 埼玉新聞

大石学 (2007) 江戸の教育力 東京学芸大学出版社

北脇雅男 (1937) 北海道におけるアイヌ人兒の童教育について、教育心理研究12巻

国立公文書館・アジア歴史資料館 (2014) 台湾原住民族～日本の調査にみるその文化～『知ってなるほど 明治・大正・昭和初期の生活と文化

(<http://www.jacar.go.jp/seikatsu-bunka/p07.html>)

後藤岩男 (1934) 朝鮮満洲旅行の印象 (一) —東京より奉天まで 教育心理研究第9巻

後藤岩男 (1935) 植民地に於ける学校教育 教育心理研究 第10巻

Searchina 2014年6月25日 台湾国立故宮博物院：記者会見で院長が涙…名称問題で紛糾、日本での特別展がやっと開催 (<http://news.searchina.net/id/1535937?page=1>)

台北市政府文化局 (2011) 台北二二八記念館の常設展示特集 台北市政府文化局・台北二二八記念館

台北二二八記念館 (2013) 台北二二八記念館 日本語・案内図

高雄市立歴史博物館 (2013) 二二八 見證臺灣 0306

東京文理科大學六十年史編集委員 (1931) 東京高等師範學校・東京文理科大學創立六十年 東京文理科

大学

- 鄧相揚（トン／シャンヤン）（2000）抗日霧社事件の歴史-日本人の大量殺害はなぜ、おこったか史実シリーズ（下村作次郎・魚住悦子共訳）日本機関紙出版
- 鄧相揚（トン／シャンヤン）（2001）抗日霧社事件をめぐる人々-翻弄された台湾原住民の戦前・戦後史実シリーズ（下村作次郎【監修】/魚住悦子【訳】）日本機関紙出版センター
- 中野佐三（1934）朝鮮満洲旅行の印象（二）-奉天より歸京 教育心理研究 第9巻
- 栖崎淺太郎（1939）中華民國維新政府招聘小學校教員再教育 講師トシテノ任務遂行ニ關スル報告 教育心理研究 第14巻
- 林 惠玉（2012）日本統治か台湾博覧会とその宣伝活動 中央大学経済研究所 第43号 597-648.
- 坂西友秀（2005）「近代日本における人種・民族ステレオタイプと偏見の形成過程」多賀出版
- 坂西友秀（2006）「心理学研究」における民族の心理学的研究-植民地における教育と教育心理学』『日本における教育心理学の成立と展開を巡る歴史的研究』、平成15年-17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1）研究成果報告書（研究代表 高砂美樹）
- 坂西友秀・小谷野邦子 2012年11月 「戦前期学校教育における心理学の位置づけ」 日本教育心理学会第54回総会（琉球大学）
- 坂西友秀 2014年11月 教科教育・教育方法学の基礎としての教育心理学の発展過程-教科の教育・学習過程の教育心理学的研究を例に- 日本教育心理学会大56回総会（神戸大学）
- 古川勝三（2013）日本人に知ってほしい「台湾の歴史」 創風社出版
- 松本安生（2007）日本の放送開始と後藤新平 NHK放送文化研究所（財）東京市政調査会 月刊誌『都市問題』に寄稿 同誌第98巻9号より転載）
- <http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/history/pdf/070810.pdf>
- 丸山良二（1935）臺灣及び滿鮮の印象 教育心理研究、第10巻

※本研究は、平成25年度（2013年度）・平成26年度（2014年度）に学術振興会より科学研究費（課題番号 25381012）の助成を受けて行ったものである。

(2014年9月28日提出)
(2014年10月10日受理)

The influence of the two world war, the World War I and the World War II, on the research on Japanese educational psychology (I).

Focusing on the relationship of Japan with other three countries,
Taiwan, “Manshukoku” (China) and France

BANZAI, Tomohide

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

The purpose of this study is to clarify the background of the times when psychological studies about school education increased during the World War I and World War II. I analyzed the social context of that times, referring to “Taiwan” which was a colony of Japan and the “Manchurian” of “MANSHUKOKU” in northeast China which was established by Japan. Total discussion was made referring to France which was the one of the allied powers which fought against Germany, Japan, and Italy in the world war second. In the discussion I presented the three problems that the war brought us from viewpoints of the educational psychology. The first one is that “the war does not save people, and the forces repeat massacre and barbarity”. The second point is that the resistance movement, and the resistance for the occupying power save country. The third is, “the ruler forces the education of the ruler’s country on the colony people”. About the first problem, I pointed out the essential characteristics of violence that all of the war has, referring to the massacre occurred in Taiwan and the brutal conducts to the “Manchurian” in northeastern China by Japanese army. I also referred to the erasure of the Oradour villagers conducted by the Nazi SS in France. About the second point, I proved “anti-national traits” of the war. As an example, I showed the evidence that a lot of citizen and many of the democratic leaders were killed by Japanese army and by “Kuomintang of China” government immediately at the end of the world war, using the three kinds of materials displayed in the “228 Memorial” in Taiwan, the “Memorial Park of the Revolution Patriots” in State of China, Yanbian Korea group self-government Yanji City, and the French “Resistance Memorial”. On the third point, I made it clear that the government utilize educational system of their country to make influence on colonial inhabitants in the war time. As an example, I explained that Japanese government implanted Japanese educational system into Taiwan and China which were the colonies of Japan, and forced the colonial people to use only Japanese language. In every time and everywhere, great many of civilian lives were sacrificed during the war. The war does you and your enemy no good and much harm for both countries. This is the conclusion of the main subject.

Key Words : educational psychology, world war, education in colony, Shoah, resistance against Japan,